



▲工房で煙管づくりを行う飯塚さん

▶左：ロンドンでの実演の様子
右：産業史料館に展示してある飯塚さんの作品



※外務省による取り組みとして、イギリス・ロンドンに設置された欧州向けの日本文化の対外発信拠点

飯塚昇さんは1934年、燕市生まれ。父の背中を追って中学卒業後、煙管作りの道へ進みました。1970年頃に一度転業。その後、60歳で「させる屋のぼる」を開業し、再び煙管職人として歩み始めます。2012年には「にいがた県央マイスター」に認定。展示会への出展にも積極的で、2018年にはロンドンにある「ジャパン・ハウス ロンドン」で煙管作りを実演。外国人に燕のものづくりの成り立ちや職人の姿勢を伝え、現地の人から、熱心な質問を受ける場面もありました。

2025年1月、90歳で逝去。生涯を通じて燕の煙管産業を支え続けた、煙管を専門とした燕市出身の最後の職人です。

若い移住者が影響を受けた、燕に生きた煙管職人・飯塚昇さん

出会いがつなぐ、新しい物語

岩浪さんが、燕市への移住を決断した背景はものづくりの歴史や技術だけではなく、燕で出会った人たちの人柄や出来事が、このまちで“ものづくり”に挑戦しようという気持ちを後押ししました。

interview

「初めまして」で、プロポーズ。独学の若者に「燕で挑戦してみない？」

2020年12月、玉川堂の銀座店に「埼玉で煙管を作っている若者がいる」とお客さんから紹介を受け、岩浪さんが作品を持参して訪れました。山田さんは当初、販売の相談かと思っていたそうですが、目の前に差し出された作品を見て驚きます。



移住のキーパーソン
株式会社玉川堂
山田立さん

「よくできているな、と思いました。どうやって作ったのか聞いたら、YouTubeを見ながら独学で作った」と。「このままでどうするの？」と聞いたら、特に考えていないと言う。これはもったいないと思いました」

そのとき山田さんの頭に浮

「よくできているな、と思いました。どうやって作ったのか聞いたら、YouTubeを見ながら独学で作った」と。「このままでどうするの？」と聞いたら、特に考えていないと言う。これはもったいないと思いました」

そのとき山田さんの頭に浮

かんだのは、当時、燕で唯一の現役煙管職人・飯塚昇さんの存在でした。

「岩浪さんの作品を委託販売で終わらせるのは簡単。でも燕に来てくれれば、燕の煙管を未来につなげることが出来る。岩浪さんにとっても、飯塚さんに習ったと胸を張って言える方がいい。思わず『燕に来て、本気でやってみませんか？』と伝えていました」

思いがけない提案は、まるで初めて会った日にプロポーズしたような感じだったと山田さんは笑います。

その後、市の移住サポートもあり、岩浪さんは2021年9月に燕へ移住。わずか1年足らずの出来事でした。

移住後、岩浪さんは飯塚さんから基礎を学び、確かな技術を身につけていきました。

今では、玉川堂の彫金師とコラボレーションした作品を手がけ、銀座で開催された煙管展にも出品するなど活躍の場を広げています。

さらに山田さんは、若い人材が加わることで、技術や文化の継承に向けた新しい仕組みづくりの必要性を強く感じたといいいます。



▲玉川堂とコラボレーションした岩浪さんの作品

「煙管や鉋起銅器に限らず、このまちに伝わる技術や先人の思いをとにかく次の世代に残したいのです。岩浪さんが来てからは、道具や場所など初期投資なしでも参画できる枠組みをつくらなければと強く思いました。個人的に取り組んでいる人もいますが、業界の仕組みとして必要なと思います」

消えつつあった燕の煙管産業にとって大きな転機となった二人の出会い。山田さんの提案の裏には、燕に昔から受け継がれてきた技術を未来につなぐ、伝統と最先端の技術が融合・共存することで、ものづくりの幅を広げ、燕を他には真似できない「ものづくりのまち」にしたいという想いがありました。

岩浪さんと出会った地元民の

声

移住担当者

■ 移住支援をサポート

玉川堂の山田さんから「面白い子がいる」と紹介され、初めてお会いしたときは、おとなしく真面目な好青年という印象でした。

地域振興課在籍時には、移住体験ツアーのアテンドや、都内・オンラインでの移住相談、煙管制作に適した住まい探しなどをサポートしました。燕市でぜひ煙管制作を続けてほしいという思いとともに、地域に自然と溶け込み、人とのつながりを広げながら、生活やビジネスが順調に進むよう意識して支援してきました。

移住後は、移住者交流会として岩浪さん宅で煙管の解説会を開催したことや、NHKの移住者紹介番組の取材を受けたことが、特に印象に残っています。

燕市の移住関連の事業の詳細はこちら▶



燕市社会福祉課(元地域振興課)

いたばし ようすけ
板橋 洋祐

煙管愛用者

■ 地元の文化を改めて学んだ

岩浪さんとの出会いは、イベントがきっかけでした。直接お会いして話をしてみても、それまで私は、煙管を「道具」としてしか見ていませんでしたが、彼と出会ったことで文化や歴史に興味を持ち、自分なりに背景を調べるようになりました。燕の煙管の歴史の中で、研磨やプレスといった技術を通じて大量生産へと移行した部分に、燕らしさを感じます。その積み重ねが今のものづくりにつながっているんだと思います。

私自身ものづくりに携わっていますが、新しいものを作っていく中で、「こうしなければならない」という形はありません。プロセスは多様であっていい。煙管にとどまらず、燕のものづくりを未来につなげていくためには、若い世代の感性や視点が欠かせないと思います。

株式会社中央製作所(燕市)

かねこ りょういち
金子 龍一さん

